

## 道教と〈胎〉

——『雲笈七籤』所載〈胎内生成論〉を中心として——

山 下 琢 巳

### はじめに

人は、どのようにしてこの世に生を受けるのか。そして、生を受けた後、どのように母胎で十ヶ月間成長するのか。中国では、古来、様々な分野において、この問い合わせに対する説明が行われてきた。

それは、前漢中期以降に成立したとされる『黄帝内經』の内容を伝える『黄帝内經太素』、馬王堆漢墓出土の『胎產書』、隋巢元方の『巢氏諸病源候論』、唐初孫思邈の『千金要方』といった医方書、また、春秋時代管仲の著作とされる『管子』、前漢劉安撰の『淮南子』、六朝時代の偽撰とされる『文子』などの思想書、さらに、隋の蕭吉撰『五行大義』といった陰陽五行説の書にも見える。そして、また、八世紀前半頃の成立とされる中国撰述経典『仏說父母恩重經』を増広した『仏說大報父母恩重經』や七世紀初頭隋末唐初の中国撰述経典『淨土盂蘭盆經』で確立される〈目連救母〉譚の系譜を引く〈目連戲〉では、「孝」という儒教倫理を説くために、俗講または演劇の場で、母親の懷胎十月の受苦が語られる。

道教は、広大な大地と多様な人民を有する中国の固有の民族宗教として芽生え様々な思想を取り入れて発展してきた。〈胎〉についても、医学思想を始めとしてその他の諸思想を接收して独特の教理が形成された。道教教理の原型のひとつに、不老長生への希求がある。胎児は、母胎での十ヶ月間、食

物を攝取することなく成長を続ける。道教では、これを胎児が母の呼吸を通して精気と元気を呼吸するためと考え、不老不死の術へと取り込む。胎息と呼ばれる呼吸法では、鼻口による呼吸をさけ、胎内の赤子のように呼氣は多く吸氣は少なくして、元氣を体内に蓄積していく。やがてこの精氣は下丹田で凝結して〈胎〉として形成される。万病は、この〈胎〉によって自ずから去るとされる。

道教では、胎児を神聖視して、〈胎〉という字を尊重する。陰陽の交接によって、無または虚から有である〈胎〉として生じた胎児は、母胎内で十ヶ月間どのように成長するのか。この点につき、『雲笈七籤』所載の經典を中心にして道教の説を探っていく。

### 一、『雲笈七籤』稟生受命部

『雲笈七籤』(SN1032) 一一一卷は、北宋の張君房の撰。書名は、雲中の葛籠に秘められた七種(三洞四輔)の神書の意。道教の類書として、世に小道藏といわれる。『四庫全書総目提要』に拠れば、君房は岳州安陸(現湖北省)の人。景德年中(一〇〇四~一〇〇七)、進士に及第し、尚書度支員外郎として経書の収集整理にあたる。大中祥符年中(一〇〇八~一〇一六)、罪を受けて御史台の職を解かれ寧海(現江蘇省)に左遷される(君房岳州安陸人、景德中進士及第、官尚書度支員外郎、充集賢校理、祥符中自御史臺

謫官寧海)。時に三代皇帝真宗(在位九九七~一〇二三)は、崇道の念厚く、

王欽若を總統に命じて大規模な『道藏』編纂を行わせていた。『雲笈七籤』自序には、君房が罪を許されて『道藏』編纂に関わったこと、および『雲笈七籤』の成立事情が記される。

枢密直學士戚綸と翰林學士陳堯佐は、沖素大師、朱益謙、馮德之といった道士に宮廷秘藏で唐写の道書『太清宝蘊』を修訂させて、經藏として進上した。しかし、その綱條は、はつきりせず、部分も長短入り交じって不揃いで、『三洞瓊綱』『玉緯綱目』といった唐の道藏類目とたがつてあわない。歳月は過ぎゆくものの分類整理は終わらない。そんな時、王欽若に請われてその編纂の任に就くことになり、大中祥符六年(一〇一三)著作佐郎となつて編纂を任せられた。宮中の道書ならびに蘇州・越州・台州から取りよせた五代時代の道藏各千余巻、さらに福建などの道書を、道士たちと三洞綱條、四部錄略、品詳科格に従つて、異同を較べて良し悪しを明らかにし、順序を決め、ここに漸く道藏として完成した。全四千五百六十五巻、函目は、「千字文」の「天」字に始まり「宮」に終わつて四百六十六字、題して『大宋天宮寶藏』という。天禧三年(一〇一七)春、清書本七蔵成つてこれを献上する。

浅学の身ながら幸運を得て神仙の職に就き道藏編纂に関わることができた。そこで、三洞(洞真部・洞玄部・洞神部)それぞれの三乘(大乗・中乗・小乗)を精究し、四輔(洞真部を補佐する太玄部・洞玄部を補佐する太平部・洞神部を補佐する太清部・三洞すべてを補佐する正一部)を詳観して、機要を採摭し、文を分類し、宝蘊に収められた諸子の奥義を略して、「雲笈七部之英」として撰びとり一二〇巻となした。これを習えば雲漢の遊に導かれ、これを覽れば天人の際を極めるであろう。まず真宗皇帝の礼遇の恩に酬いるため、次に皇帝陛下の書見のため、そして校讎の職にある官吏の閲覧のために、道教の指帰を尽くしてこれを著す。

『雲笈七籤』には、道教の經典七百余種が、論説を加えることなく、分類されて全録あるいは節録される。その内容は、教理教義、方術科儀、神話源流、歴史伝記、經籍詩詞にわたり、現在は佚經となつた經典も收まる。君房が精根を傾けた道藏『天宮寶藏』は、現存しないが、小道藏とされる『雲笈七籤』には、次の四系統の版本が伝わる<sup>(註)</sup>。

①蒙古の馬真后三年(一二四四)所刻『玄都寶藏』本(この道藏のうち僅かに『太清風露經』と本書だけが北京図書館に伝わる)。

②明の正統十年(一四五)開版『正統道藏』本。

③明の清真館本(『四庫全書』に、浙江の孫仰曾家蔵の明代の書を張萱が刊行、また、『四庫叢刊』に、明の清真居士張萱補として、それぞれ収まる)。

④清末光緒三十一年(一九〇六)成都一仙庵刊『重刊道藏輯要』本。

『雲笈七籤』卷二十九から卷三十一は、「稟生受命」と分類される。「稟生受命(ひんせいじゅめい)」とは、この世に生を稟け、命を授かること。この部は、「稟受章」「太上九丹上化胎精中記」「解胎十二結法」「帝一混合三五立成法」「九真中経天上飛文」「大洞廻風混合帝一之法」「太微帝君太一造形紫元内二十四神回元經」「濟衆經」「説真父母」「九真帝君九陰混合縱景万化隱天訣」の十項より成る。これらの項目では、人の生命の起源、人の体内に宿る諸神、胎息による保氣長生法、体内神を思念する存思長生法に関する經典が收まる。そして、そのうちで「稟受章」に掲載される『内觀經』と『因縁經』、また次項の『太上九丹上化胎精中記』といった經典に「十月胎形説」が見える。

## 二、『内觀經』所載「十月胎形説」

「稟生受命」部の第一項は、「稟受章(人が生命をうけること)」と題され、この部の総論としての内容を持つ道教經典からの抜粋が載る。まず冒頭は、「混元述裏篇」に曰く、それは天地の間に生まる。「一氣の和を稟<sup>う</sup>受け、万物の首<sup>かし</sup>として冠たり。最靈の位に居れり。五行の英を總<sup>すべ</sup>て三才に參<sup>あずか</sup>り、天地と徳を並ぶ。豈に貴からざらんや(混元述裏篇曰、夫人生於天地之間、稟二氣之和、冠萬物之首、居最靈之位、總五行之英、參於三才、與天地並徳、豈不貴乎)」として始まる。陰陽の二氣が和合して天地の間に生まれた人は、万物の長であり、五行の徳を備えて、天地人三才として貴い存在である。こ

れに続いて『内觀經』に云う、天地精を構え、陰陽化を布きて、人その生を受く（内觀經云、天地構精、陰陽布化、人受其生）」と『内觀經』の説に移り、その「十月胎形説」が引かれる。

『内觀經』という経典名は、同じ『雲笈七籤』の卷十七には、「太上老君内觀經」として見え、その全文が載る。「稟受章」所載の經文は、『太上老君内觀經』冒頭部分を摘録したもの。人の心は本来清静であるけれども、出生後、六情に染まって欲心がおこり、苦海に入る。その原因はすべてその心にあるので、心を清靜にすれば、よろずの禍はうまれない。道を修めることが心を修めることで、「内觀己身、澄其心也」と自身を内觀することを説く。本經は、禪宗思想の影響を大きく受けしており、唐代のものかとされる。

また、宋の董思靖撰『洞玄靈宝自然九天生神章經解義』(SN396)卷一では、「内觀經云一月…、内觀經云二月…、内觀經云三月…」などとして、『内觀經』の「十月胎形説」が注の形で引かれる。

以下、元代の道書に記されたものについて見ると、『修真十書』(SN263)「雜著捷徑（修真への近道のための雜書）」篇卷十八に、「煙蘿子内觀經」という書名が見える。煙蘿子、姓は燕、五代十国時代、後晋の天福年間（九三六～九四一）の道士。同書同巻には、また、各臟器の連続関係を記したものでは、中国で最も古いもののひとつとされる解剖図が載る。『修真十書』は、全真教の南宗一派が相承する内丹説をその主な内容とし、その成立は、元初頃とされる。「煙蘿子内觀經」では、「天地は精を媾えて万物を化生す。父母は交合して人従い以て生る（天地媾精萬物化生、父母交合人従以生）」と始まり、「十月胎形説」が続く。その「十月胎形説」は、『雲笈七籤』所載の『内觀經』のものを省略した形となっている。

また、同じ『修真十書』「雜著捷徑」篇の卷二十一「西嶽竇先生修真指南」には、「凡そ人の生るるは、初め父と母の精血交わり、造化して形を成す（凡人之生也、初父與母交精血、造化而成於形）」と説き、男子の場合、腎、脾、肝、肺、心、小腸、大腸、膽、胃、膀胱、腎、三焦、三元、八脉、十二經、十五絡、百八係絡、百八十五津絡、三百六十五穴、三百六十五骨と順次形成され、「胎に処ること十月にして生まる（處胎十月而生）」として、『雲笈七籤』所載『内觀經』（十月胎形説）と同文が載る。

加えて、『太上洞玄靈宝无量度人上品妙經注』(SN91)卷中に、「故老君曰、天地媾精、陰陽布化」として、これも『雲笈七籤』所載『内觀經』（十月胎形説）と同文が載る。本經は、元代の道士陳觀吾による「靈寶無量度人經（靈寶天尊の説かれた長生不死のお經）」の注釈書。「至元丙子（一二七六）中秋金螺山北紫霄絳宮上陽子陳觀吾序」との自序によれば、「度人經」は、元始天尊が撰し、玉晨道君、玄一真人、天真皇人、黃帝の順に伝授された。その後、前漢の時、西王母が漢の武帝に授け、後漢の時、太上老君（老子）が降臨して干吉に授けて「靈書上篇」、吳の時、太極真人が葛玄に授けて「靈書中篇」鄭思遠が抱朴子葛洪に授けて「靈書下篇」と「太極真人後序」が増補されたという。そして、世間の人は、長生不死のために念誦祈祷することは知っているけれど、還丹久視の方法があることは知らない。そこで、『度人經』に私の注と先人の解釈を付して理解を容易にしたい。この經の中にこそ皆が希求する不老不死への近道があると説く。

以上、『内觀經』（十月胎形説）を省略したものと考えられる「煙蘿子内觀經」（煙）、『内觀經』（十月胎形説）の原型を伝えると考えられる『雲笈七籤』卷二十九「内觀經」（雲内）、『太上老君内觀經』（雲外）、『洞玄靈宝自然九天生神章經解義』（洞）、『修真十書』卷二十一「西嶽竇先生修真指南」（修）、『太上洞玄靈宝无量度人上品妙經注』卷中（度註）の記述は、次のようにある。

### 一月、爲胞 煙

爲胞、精血凝也 雲內 雲太 洞修 度註

### 二月、爲胎 煙

爲胎、形兆胚也 雲內 雲太 洞修 度註

### 三月、成魂 煙

陽神爲三魂、動以生也 雲內 雲太 洞修 度註

### 四月、成魄 煙

陰靈爲七魄、靜鎮形也 雲內 雲太 洞修 度註

### 五月、分臟 煙

五行分五藏、以安神也 雲內 雲太 洞修 度註

六月、分腑 囂

六律定六府、用滋靈也 雲内 雲太 洞修度註

七月、開竅 囂

七精開竅、通光明也 雲内 雲太

七精開七竅、通光明也 洞修度註

八月、神具 囂

八景神具、降真靈也 雲内 雲太

宮室羅布、以定精也 雲内 雲太 洞修度註

十月、氣足、始生 囂

氣足、萬象成也 雲内 雲太 洞修度註

これらの經典によれば、一月目は、父の精と母の血が凝結して膜で包まれた小さな固まりとなった「胞」、二月目は、胎児としての形を兆し始める「胎」、三月目は、胎児の動きを生じる陽神の変化した「三魂」、四月目は、胎児をしづめ落ち着かせる陰靈の変化した「七魄」、五月目は、胎児の精神を安んじる五行が分かれた「五藏」、六月目は、胎児の靈魂をやしなう六律が定めた「六府」、七月目は、胎児に光明を通すために七精が開いた「七竅」がそれぞれでき、八月目は、胎児に神靈が降りて「八景神（体内神）」が具わり、九月目は、胎児に「宮室（九宮）」が配列され精神が定まり、十月目は、胎児に気が充足してすべてができる。

三月は三魂（陽氣が三つに変化した胎光・爽靈・幽精）、五月は五臟（心臓・腎臓・肺臓・肝臓・脾臓）、六月は六腑（大腸・小腸・膀胱・胃・胆・咽喉）、七月は七竅（耳・目・鼻・口）、八月は八景神、九月は九宮（明堂宮・洞房宮・泥丸宮・流珠宮・王帝宮・天庭宮・极真宮・玄丹宮・天皇宮）とするところは、数の同一性を尊重する中国思想に由来するが、道教經典の「十月胎形説」は、基本的に、この生成順序をたどる。

### 三、『因縁經』所載　〈十月胎形説〉

『雲笈七籤』の「稟文章」で、『混元述稟篇』『内觀經』に続いて引かれるのが、『因縁經』である。「因縁經に曰く、人始めて身を受くるは、虚無の中より來たり。黃を廻し白を転じ、氣を構え精を凝り、天を承け地に順い、陰陽を台化す（因縁經曰、人始受身、從虛無中來、廻黃転白、構氣凝精、承天順地、合化陰陽）と受胎の説明があり、〈十月胎形説〉に続く。

『因縁經』との経名を持ち〈十月胎形説〉を載せる道教經典に、『太上洞玄靈宝出家因縁經』(SN339) と『太上洞玄靈宝業報因縁經』(SN336) がある。

『太上洞玄靈宝出家因縁經』一巻は、人の宿命と因縁を説き、その解脱のために出家を勧めており、極めて仏教の影響色濃い道教經典。この經典では、生まれてくる胎児に三万六千の神が宿ることを説き、胎児の一月から八月の状態である「胞」「胎」「魂」「魄」「臟」「腑」「竅」「景」に、訓詁を施し、その意味づけを行う。

『太上洞玄靈宝業報因縁經』十巻二十七品は、すべての巻が、普濟真人の業報因縁とは何かという問い合わせに太上老君が答えるという形式で始まり、罪福音凶が因縁によるものとして、その纏縛を離れるための方を説く。この經典には敦煌遺書に断簡が伝わり、唐以前の成立とされる<sup>(注)</sup>。その巻八「生神品」に、「人始受身、皆從虛無自然中來、回黃転白、構氣凝精、而元父生神、玄母成形、承天順地、合化陰陽」と『雲笈七籤』所載『因縁經』と類似の經文があり、「萬化の中人を最も貴しとなす。故に始め胎中に入りて三氣潛凝して、九天冥運す（萬化之中人最爲貴、故始入胎中、三氣潛凝、九天冥運）として、『雲笈七籤』所載『因縁經』の〈十月胎形説〉とほぼ同様の文を載せる。また、『因縁經』との経名を持たない、『靈宝无量度人經大法』(SN219) 卷六十四の「九煉生尸品」、『上清靈宝大法』(SN1221)「大煉符籙門」卷五十二の「九煉生尸符章」といった章にも、同様の〈十月胎形説〉が載る。『靈宝无量度人經大法』七十二巻、原題は『天真皇人撰集』。天真皇人は、

『抱朴子』「地真篇」によれば、黃帝に守一の長生法を受けたとされ、「歷世神仙体道通鑑」(SN296)、明の道士趙道一編修では、峨眉山に住み、黃帝に長生法「五芽三」の文と長生經「靈寶無量度人經」を受けたとする。本經には、宋元以来の呪術的なお札である符籤の道法と内丹術の結合が見え、靈寶派道士によって明初に編纂されたといわれる。<sup>(注10)</sup>

『上清靈寶大法』六十六卷、卷頭に、「洞微高士開光救苦真人甯全真授上清三洞弟子靈寶領教嗣師王契真纂」とある。甯全真には、「靈寶領教濟度金書」(SN466)の著があり北宋末南宋初の人。また、王契真も南宋の人。道教の祭儀・儀礼である斎醮・科儀、また、各種方術が記され、符図を千種余り載せる。

『靈寶无量度人經大法』は「皇人（天真皇人）曰」、「上清靈寶大法」は、「師（甯全真）曰」として経文が始まるが、ともに「それ九煉生戸の法は最も上道となす。人始めて生を受くるに、皆虛無の中より来る。其の昔業に資らずして今縁に会遇することなし。乾坤を取象し、日月を含懷し、陰陽を変化して、神識往来す。萬化の中三焦潛凝し、九天冥運す。皆九天生神の氣合和して生る（夫九煉生戸之法、最爲上道、人始授生、皆從虛無中來、莫不資其昔業會遇今縁、取象乾坤、含懷日月、變化陰陽、神識往来、萬化之中三焦潛凝、九天冥道、皆以九天生神之氣合和而生）」との経文を載せ、「十月胎形説」に続く。そして、ともにその後に、九煉生戸の方法が載る。

以上、「雲笈七籤」所載「因縁經」（雲因）、および、それと依拠を同じくする「十月胎形説」を載せる『太上洞玄靈寶業報因縁經』卷八「生神品」（業因）、『靈寶无量度人經大法』卷六十四「九煉生戸品」（靈九）、『上清靈寶大法』卷五十二「九煉生戸符章」（正九）、また、「因縁經」との経名を持ちながら、前掲の經典とは異なる説明を載せる『太上洞玄靈寶出家因縁經』（大因）の「十月胎形説」を示すと次のようである。なお、十月目は「十月而生」とするか、あるいは記述がないので省く。

一月、爲胞、鬱單天氣下浹身中 雲因

爲胞、鬱單無量天氣下浹身中 業因

爲胞、鬱單無量天眞氣降爲之 靈九

爲胞、鬱單天氣降爲之 正九

胞者包也、元氣包裹結聚、混黃運轉生化中有真精 天因

二月、爲胎、無量壽天氣下浹身中 雲因

爲胎、上上禪善無量壽天氣下浹身中 業因

爲胎、上上禪善無量壽天眞氣降爲之 靈九

爲胎、禪善天氣降爲之 正九

爲胎、胎者恢也、神乘宿命來降父母身中、構造陰陽恢廓其形 天因

爲胎、須延天氣下浹身中 雲因

爲胎、梵監須延天氣下浹身中 業因

爲胎、梵監須延天眞氣降爲之 靈九

爲胎、梵監天氣降爲之 正九

四月、魄成、寂然天氣下浹身中 雲因

魄成、寂然兜術天氣下浹身中 業因

魄成、寂然兜術天眞氣降爲之 靈九

魄成、寂然天氣降爲之 正九

五月、生藏、不驕天氣下浹身中 雲因

生藏、波羅尼密不驕樂天氣下浹身中 業因

生五臟、波羅尼密不驕樂天眞氣降爲之 靈九

化膽、波羅尼密不驕樂天氣降爲之 正九

爲臟、臟者藏也、陰陽有象五行列分置立五臟、肝心脾肺腎以藏、五神攝御萬靈生化一身 因因

六月

具六府、化心声天氣下浹身中 雲因

化腑、洞玄化心声天氣下浹身中

雲因

化腑、洞玄化心声天氣降爲之

靈九

化腑、腑者聚也、積聚淳液溉灌五神、大小腸胃膽焦膀胱、消息穀

爲腑、腑者聚也、積聚淳液溉灌五神、大小腸胃膽焦膀胱、消息穀

太因

爲腑、腑者聚也、積聚淳液溉灌五神、大小腸胃膽焦膀胱、消息穀

太因

七月

明竅、梵輔天氣下浹身中 雲因

明竅、靈化梵輔天氣下浹身中 羲因

雲因

明竅、靈化梵輔天氣降爲之

靈九

明竅、靈化天氣降爲之

太九

爲竅、竅者通也、出入視聽内外開明

太因

八月、景附、清明天氣下浹身中 雲因

景附、高虛清明天氣下浹身中 羲因

雲因

景附、高虛清明天真氣降爲之

靈九

景附、高虛天氣降爲之

太九

爲景、景者警也、三部八景警備人身

太因

九月、神降、無愛天氣下浹身中 雲因

神降、無想無結無愛天氣下浹身中 羲因

雲因

神降、無想無結無愛天真氣降爲之

靈九

神降、無想無結無愛天氣降爲之

太九

神具 太因

胎児が、「胞」「胎」「魄」「魄」「藏」「府」「竅」「景」という順で生育するは、さきの『内觀經』所載〈十月胎形説〉に同じ。ただし、『太上洞玄靈宝出家因縁經』を除くと、これらの經典では、胎児九ヶ月生成の過程で、月毎に九天の気、すなわち鬱單無量天氣、上上禪善無量壽天氣、梵監須延天氣、寂然兜術天氣、波羅尼密不驕樂天氣、洞玄化心声天氣、靈化梵輔天氣、高虛清明天氣、無想無結無愛天氣が降って胎児にあまねくゆきわたるとする。そして、共に「天神一萬八千、身神一萬八千、内外相合して三萬六千神一時に生る。神金樓玉閣紫戶青門に分靈して布化す。身中の表裏に匝繞し、声に相応して尚神具わり、十月にして生る。人胞胎の中に在りて三元九氣を養育して布化し、昼夜停まずして転変す（羲因）」などといった經文を載せる。

九天の氣を受けた胎児には、三万六千の神と、その神々が住む個々の宮殿が具わる。これらの神々は、その住處である器官を機能させるとともに、身体がむしばまれたり、身体に悪気が入るのを防ぎ、誕生後の人々の生命を司る。そして、また、人の頭上三尺のところに北斗七星の気が結んでできた一星があり、「人善を為すは、其の星の光大にして明るく、悪を為すは、其の星暗冥にして小さし。善を積むめば則ち福となり、悪を積むことの至れば則ち災いとなり生星の光墜滅して、其の身死す（雲因）」とも言う。胎児に宿った神々は、積善で保たれるが、惡徳を繰り返すごとに離れていく、やがて主要な神がいなくなつたとき、人は死ぬ。

## 大洞帝草示現之圖



(注11) 嬰兒に萬神具わる圖

#### 四、『太上九丹上化胎精中記』所載「十月胎形説」

『雲笈七籤』卷二十九「稟受章」では、「因縁經」に統いて、「生神經に曰く、人の生を受くるに、胞胎の中において、三元は養を育て、九氣は形を結び、九月神布き、氣満ちて声をよくし、十月神具はる（生神章經曰、人之受生、於胞胎之中、三元育養、九氣結形、九月神布、氣滿能声、十月神具）」として、『洞玄靈寶自然九天生神章經』（SN318）の説、そして、次に、「真文經に曰く、人の生まるるや、頭円は天を象り、足方は地に法り、髮は星辰と為し、目は日月と為し、眉は北斗と為し、耳は社稷と為し、口は江河と為し、齒は玉石と為し、四肢は四時と為し、五臟は五行に法り、天地と其の體を合わせ、道徳と其の生を齊くす。大なるかな、貴なるかな（真文經曰、人之生也、頭圓象天、足方法地、髮爲星辰、目爲日月、眉爲北斗、耳爲社稷、口爲江河、齒爲玉石、四肢爲四時、五臟法五行、與天地合其體、與道徳齊其生、大矣、貴矣）」と、「真文經（佚經）」の説を載せる。このふたつの經典の引用された部分には、「十月胎形説」は、見えない。次は、項目が変わつて「太上九丹上化胎精中記」「解胎十二結法」に統く。

『太上九丹上化胎精中記經』（SN1382）一卷、別名『九天瓊胎靈曜』、梁の陶弘景（四五六～五三六）撰『真詰』（SN1016）卷五の上清經目録に『九丹變化胎精中記』、『上清衆經諸真聖秘』（SN446）卷一に録する上清諸經のうちに『九丹上化胎精中記』、『三洞奉道科戒宮始』（SN1125）卷五の「上清大洞真經目」に「太上九丹上化胎精中記經」（卷とそれぞれ見え、初期上清經典のうちのひとつ。成立は六朝期頃かとされる）。その卷末に、「九丹上化胎精中記、一名瓊胎靈曜」とし、「太帝君以て南極夫人に伝え、南極夫人以て太微天帝君に伝え、太微天帝君以て後聖全闕帝君に伝え、全闕帝君以て上相青童君に伝え、青童君更に撰集し上下の次第を施用して西城真人に付す」と、その伝来を記す。その内容は、人は、胞胎中に形成された体内の上中下十一箇所にある結節が固まって塞がると死に至る。それを解結する方法は、「上化九丹陽靈之符」「胎精鍊神之符」「三閨十二結胞胎內符」「九丹流精保命之符」を服の上に付け二十四真、玄父、玄母などを存思するにある。そうす

れば、長生不老を得ることができると説く。

『雲笈七籤』卷二十九には、「太上九丹上化胎精中記經」（胎）の冒頭よりの六割弱が「太上九丹上化胎精中記」（雲胎）「解胎十二結法」と題されて載る。また、魏晉南北朝期までに成立した道教類書としては現存最古の『無上秘要』（SN1138）卷五「人品」に「右出洞真九丹上化胎精中記經」（無胎）として、「太上九丹上化胎精中記」と同じ部分が引かれる。

本經では、「凡そ陽氣は赤にして名づけて玄丹と曰い、陰氣は黃にして名づけて黃精と曰う。陰陽交接して二氣精を降し、神と化し胎と結び、上りて九天に應ず。九天之氣とりて丹田に布き、精と合凝し、命門に結会す。すべからく九過せんとす。是を九丹となし、上りて化し下りて凝し、以て人と成る（凡陽氣赤、名曰玄丹、陰氣黃、名曰黃精、陰陽交接、二氣降精、化神結胎、上應九天、九天之氣、下布丹田、與精合凝、結会命門、要須九過、是爲九丹、上化下凝、以成於人）」として、次のような「十月胎形説」に統く。

一月、受氣	雲胎	胎	無胎
二月、受盡	雲胎	胎	無胎
三月、含變	雲胎	胎	無胎
四月、凝精	雲胎	胎	無胎
五月、體首具	雲胎	胎	無胎
六月、化成形	雲胎	胎	無胎
七月、神位布	雲胎	胎	無胎
八月、九孔明	雲胎	胎	無胎
九月、天氣普、乃有音聲	雲胎	胎	無胎
九天氣普、乃有音聲	胎	無胎	
十月、司命勤籍、受命而生	雲胎	胎	無胎

一月目は、陽氣「玄丹」と陰氣「黃精」が交合して生じた「氣」を受ける。二月目は、「靈」を受け、三月目は、「變」を含み、四月目に、「氣」が凝結して「精」となる。五月目に、「體（胴体）」と「首」が具わり、六月目に、人としての「形」が成り、七月目に、「精」が化して「神」と成り体内に位

置をしめる。八月目は、「九孔（目・鼻・口と下半身の陰竅）」が明き、九月目に、毎月降りてきた「九天の氣」があまねくいきわたり、胎児は音声を発する。そして、十月目に、人の寿命を司る神「司命」が、名籍に名をきざみ、命を受けて出生する。

この胎児形成過程は、さきの『内觀經』『因緣經』のものとおおきく異なる。また、胎児が月毎に九天の氣を受けることは、『因緣經』にも説かれるが、降りてきた九天の氣が、胎児の丹田で九丹となると説く点が異なる。経文に、また、「凡そ人の生、九天の氣を稟け、氣凝りて精と為り、精化して丹と成り、丹変じて人となる（凡人生稟九天之氣、氣凝爲精、精化成丹、丹变成人）」とある。天から胎児に降りてきた気は、かたまって精になり、その精は変化して丹となる。降りてきた気は天に昇つて、次の月に異なる気となつて、また降りてくる。このことが、九過すなわち九回繰り返されて、胎児の中に九丹が形成される。この九丹について、この經典では明らかにされていない。『抱朴子』卷四「金丹」では、「九丹は、長生の要にして、凡人のまさに見聞するところにあらざるなり」として、丹華、神符、神丹、還丹、餌丹、鍊丹、柔丹、伏丹、寒丹とする。また、類書『上清道宝經』(SN1353)卷四の「九丹」の注では、九華、神符、龍丹、還丹、餌丹、煉丹、深丹、伏丹、寒丹として、「これを服せば万世を寿ぐ」と言う。これらは、鉛・水銀などの鉱物薬、あるいは草木薬などを混ぜて作り出した丹藥で、これを用いて不老長生、若返りをはかる修練法を外丹、また、黄金などの高価な原料を用いたりすることから金丹ともいう。これに対しても、体内の精氣を循環させ、体内に丹をつくることを内丹という。『太上九丹上化胎精中記經』の説は、長生不老に欠かせない九丹が、胎児には完全に具わっているとする。

## 結語

『雲笈七籤』卷二十九「稟受章」には、三つの〈十月胎形説〉が載る。そのひとつは、『内觀經』所載の説で、その特徴は、胎児八月目に八景神が具わり、九月目には、九宮が配列されるとすることにある。また、『因緣經』では、懷胎の始まりから月毎に九天の氣が胎児に降りゆきわたること、そし

て、身体の中に三万六千の神とその宮殿ができるなどを説く。さらに、『太上九丹上化胎精中記』では、九天の氣が胎児の丹田で九丹となることが記される。

道教の養生法のひとつに「存思」がある。それは、閑静な一室に籠もり、しかるべき方角を押し、呪文を唱えた後、叩歎瞑目し、体内神の名字を順次呼んで、その神々が、しかるべき部處に安住するよう要請する。その神の数は、実修書によつては、三百六十あるいは一万二千といった膨大な数にのぼる。

また、内丹術では、呼吸と意識の集中によつて臍下三寸中に三寸の位置にある下丹田に精をつくり、これを気にかえて眉間部より三寸中にある上丹田にもつていき、また、この気を下丹田に下して精を生じさせるという鍊精をくりかえして、丹を上丹田、中丹田、下丹田に貯蔵させる。

『雲笈七籤』に載せる三つの〈十月胎形説〉と類似の説は、他の分野の中の文献には、全く見ることができない。しかし、道教独自の長生不老術を思い合わせるとき、それらの説は、聖としての〈胎〉をつくりあげているという点で、最も道教思想にかなうものであった。

## 注

(1) ①中村脩里「中国における妊娠・胎発生論の歴史」(平成18年思文閣出版)。

②拙稿「口伝秘説の捷—浅井了意と漢籍所載〈胎内生成論〉をめぐって—」『東京成徳短期大学紀要』第四〇号、平成19年3月。

(2) ①諏訪春雄「芸能の流転—懷胎十月の歌—」(『日中文化研究』9、平成8年5月勉誠社)。

②拙稿「中国目連戯〈懷胎十月の歌〉考」(『東京成徳短期大学紀要』三十五号、平成14年3月)。

(3) 道教と〈胎〉については、次の諸論を参照。

①宮沢正順「道教の人身論—入胎から出胎までを中心として—」(『宗教文化の諸相』竹中博士頌寿記念、昭和59年山喜房佛書林所収)。

②加藤千恵「胎の思想」(講座道教第三卷『道教の生命觀と身體論』平成12年雄山閣出版所収)。

(4) 改版『道教經典史論』吉岡義豊著作集第三卷（昭和63年五月書房）参照。なお、

旧版は、昭和30年道教刊行会。

(5) 蔣力生校注『雲笈七籤』（1996華夏出版社）前言参照。

(6) 任繼愈主編、鐘肇鵬副主編『道藏提要』修訂本（1991中国社会科学出版社）参

照。

(7) 注(6)に同じ。

(8) この「十月胎形説」に類似したものが、元時代の『太上老君常清靜經註』

(SN1227)に次のように見える。

一月爲胞

二月爲胎

三月爲三魂

四月爲七魄

五月生五臟

六月化六腑

七月明七竅

八月八景降

九月神降、一萬八千内外相合、三萬六千精光、神降形具十月満足

(9) 注(6)に同じ。

(10) 注(6)に同じ。

(11) 衛琪註『玉清無極真文昌大洞仙經註』(SN103、至大三年・一三一一年・成)卷一

に付された図。本文には、「夫人之身、以萬氣凝而成形、萬神具而始生、既生爲嬰兒、純和冲粹、天理混如、即大洞帝尊之本體也、若修文昌復帰於嬰兒謂之形神俱妙」とある。

(12) ただし、『洞玄靈宝自然九天生神章經』全文について見ると、次のように、九回にわたって、胎兒に、「胞」「胎」「魂」「魄」「藏」「胃管」「孔竅」「八景」「九宮」が眞わることが記される部分がある。

一過、徹天胞原宣通

二過、響地胎結解根

三過、神禮魂門練仙

四過、天王降仙、魄戸閉閥

五過、五帝朝真、藏府清涼

六過、魔王伏諾、胃管生津

七過、星宿朗明、孔竅開聰

八過、幽夜顯光、三部八景、整貝形神

九過、諸天下臨、三闕五臟、六府九宮、金樓玉室、十二重門、紫戶玉閣、

三萬六千關節、根源本始、一時生神

(13) 注(6)に同じ。

(14) 道教の養生術については、次の新旧二書に特に詳しい。

①アンリ・マスペロ『道教』(原著は、*Le Taoïsme*, Publications du Musée Guimet, Bibliothèque de diffusion, 1950)川勝義雄訳が東洋文庫329、昭和53年平凡社にある。

②石田秀実『氣・流れる身体』(昭和62年平河出版社)。